

大学生におけるレイプ神話容認態度研究

— 性に対する意識との関連 —

塚原 睦子

問題と目的

レイプ神話とは Burt (1980) によると、「レイプとレイプ被害者・加害者に関する偏見にみち、ステレオタイプの、間違っただけの信念」であると定義される。レイプ神話と一言でいっても内容は様々であるが、その内容はレイプの発生状況、レイプのシナリオについての神話、被害にあった女性の特性を挙げ、レイプ発生の責任を女性に転嫁する神話、女性のレイプ願望神話など、女性側の条件に関する神話、レイプの加害者は異常者であるというような男性側の条件に関する神話に大別することができる。しかしこうしたレイプ神話は、そのほとんどが間違いであることが多くの調査により明らかになっている。

それでは、なぜこうした全く根拠のない「でたらめ」が、社会の多くの人々に強く信じられ、保持されてきたのか。それは、こうした「でたらめ」が果たす機能が社会を構成する個人にとって都合のよいものだったからである (Lonsway & Fitzgerald, 1994)。男性におけるレイプ神話の重要な機能は、加害男性の責任を被害者に転嫁し、加害者を免責することであり、女性においては被害者を特別視し、レイプの責任は被害者側にあったとすることで、被害者になるかもしれないという不安を防衛することである (Lonsway & Fitzgerald, 1994)。Burt (1980) は驚くほど多くの人々がレイプ神話を信じており、その結果として人々がレイプやレイプ加害者に対して寛容になり、レイプが行われやすい社会的雰囲気を作り出していると警告した。またレイプ神話は、人々にレイプの真実を見えにくくし、レイプが行われやすい雰囲気を作り出すだけでなく、レイプ被害者は軽率であるか、素行のよくない女性であるといった偏見を生み出すことにより、被害女性の人権を傷つけ、また彼女たちの精神的治療の妨げにもなることが報告されている (Osborne, 1982)。したがってレイプ神話容認態度に関する研究は、レイプの発生メカニズムを解明し、その防止を行うという犯罪学の視点だけでなく、被害からの回復を支援する、被害者学の視点からも非常に重要であるといえる。主にアメリカにおいて、レイプ神話容認態度研究は数十年の間非常に精力的に行われてきた。しかし日本においてレイプ神話容認態度に関する研究はほとんどされてこなかったといってもよい。遅ればせながらも、日本における性犯罪被害を始めとする犯罪被害者支援の

動きが急速に深まりと広がりを見せている今、日本社会におけるレイプ神話容認態度の研究は急務であると考えられる。

本研究では、日本語版のレイプ神話容認態度尺度を作成し、先行研究によりその関連性が示唆されている、性的ステレオタイプ・敵対的性信念・暴力容認態度との関連性を確認する。それとともに、現代日本の若者が持つ性に対する意識の特徴として挙げられる、性に対する寛容度の高まり、セックスをする際に「愛情」よりも「合意」を重視するという変化、セックスをはじめとする性的行為は、社会などの公的規範によってコントロールされるのではなく、自分自身に決定権があるのだという、性的自己決定感の高まりという3つの性に対する意識 (矢島, 1998; 2000) がレイプ神話容認態度に与える影響についても検討を行う。

方法

(1) 対象者および実施日時

対象者はN大学の情報文化学部、教育学部、法学部、文学部、経済学部、理学部に在籍している女子学生93名 (平均年齢20歳, SD = 2.1)、男子学生89名 (平均年齢20歳, SD = 1.6) 合計182名 (平均年齢20歳, SD = 2.0) であった。質問紙は2003年11月下旬から12月中旬にかけて、配布・回収された。

(2) 手続き

講義の開始、または終了10分ほどを利用して質問紙が配布された。対象者には、本研究は「個人々の性に対する意識が日常生活の様々な問題に与える影響について、どのような心理学的アプローチが考えられるのか」を調べることを目的であると説明された。回収方法に関しては、対象者への配慮として質問紙を配布した授業後にその場で回答して提出する方法と質問紙を持ち帰り次週の講義で回収するという2つの方法を提示した。

(3) 質問紙の構成

- (1) 平等主義的性役割尺度 性的ステレオタイプを持つ傾向を測定する尺度として鈴木 (1994) が作成した15項目からなる平等主義的性役割態度スケール短縮版を用いた。平等主義的性役割尺度得点が低いほど、性的ステレオタイプを持つ傾向が高いことを示す。
- (2) 敵対的性信念尺度 Burt (1980) の敵対的性信念

から7項目、Payne et al. (1999) の同名の尺度から14項目の計21項目を用いた。

- (3) 性に対する意識尺度 和田・西田 (1991) が作成した尺度の19項目に、性の個人決定権に関する質問3項目を加えた合計22項目を用いた。
- (4) レイプ神話容認態度尺度 Payne et al. (1999) によるイリノイレイプ神話容認尺度が日本語に翻訳され、レイプ神話容認態度尺度として用いられた。
- (5) 暴力容認態度尺度 Payne et al. (1999) の個人間暴力の容認尺度20項目に、Burt (1980) の同名の尺度から3項目を加えた合計23項目を用いた。

以上5つの尺度の質問項目に対して、すべて7件法で回答を求めた。

- (6) フェイスシート：基本的属性（性別、年齢、学部、学年）
- (7) 自由記述

結果と考察

レイプ神話容認態度と平等主義的性役割態度・敵対的性信念・暴力容認態度の関連性

レイプ神話容認態度尺度45項目に対して因子分析を行った結果（主因子法、プロマックス回転）、「被害の否認・矮小化」「女性のスキ・挑発原因観」「女性の被レイプ願望」「男性の性的欲求不満原因観」という4つの因子を得た。レイプ神話容認態度尺度と、これら4つの因子を従属変数、男女平等主義的性役割態度・敵対的性信念・暴力容認態度を独立変数として重回帰分析を行った結果、これらの態度がレイプ神話容認態度に与える影響は、性別によって異なる傾向を示すことが見出された。

男子学生群においては、敵対的性信念や暴力容認態度はレイプ神話容認態度に対して正の影響を持っていたが、男女平等主義的志向性は、レイプ神話容認態度に影響を及ぼさないことがわかった。一方女性学生群では、暴力容認態度が高いほどレイプ神話容認態度は強まるが、敵対的性信念はレイプ神話容認態度に影響しないことがわかった。また男子学生においては影響を与えなかった男女平等主義的性役割の志向性が高いほど、レイプ神話容認態度は弱くなることが示された。

3つの独立要因態度と、レイプ神話の4つの下位尺度との関係においても、男女間で違いがみられた。男子学生群では、男性の性的欲求不満がレイプの原因と考える態度についてのみ、平等主義的性役割態度が負の影響を与えていた。女性学生群においては、他の3下位尺度全てに対して負の影響を与えている平等主義的性役割態度が、男性の性的欲求不満原因尺度についてのみ影響を与えなかった。

レイプ神話容認態度と性に対する意識の関連性

性に対する意識尺度22項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、「性的放縦さ」・「モノ的性意識」・「性の自己決定意識」という3つの因子を得た。これらの3因子を独立変数、レイプ神話容認態度尺度と、これら4つの因子を従属変数として重回帰分析を行った。

性的放縦さは、性別に関わらず、レイプ神話容認態度尺度に有意な影響を与えなかった。これはBurt (1980) の研究結果と一致している。しかしレイプ神話容認態度尺度の4つの下位尺度に及ぼす影響についてみると、性的放縦さは、男女ともに女性の被レイプ願望尺度に正の影響を与えていた。性的寛容さとポルノグラフィ接触経験体験の関係性を示した調査（矢島, 2000）や、女性の被レイプ願望を信じることにポルノグラフィが強力に影響していることを示す研究結果（Check & Malamuth, 1985; Briere, Malamuth & Check, 1985）などの知見をあわせると、性的に放縦であることが直接女性の被レイプ願望神話容認度を高めるのではなく、性的に放縦であることにより、女性の被レイプ願望を繰り返し繰り返し伝えるポルノグラフィに接触する機会が増し、それによってこのレイプ神話を容認するようになるという解釈が考えられる。

次にモノ的性意識意識が高まると、レイプ神話容認態度も高まることが示唆された。レイプ神話容認態度の下位尺度についてみると、被害の否認・矮小化尺度に対して、モノ的性意識尺度はレイプ神話容認態度尺度と同様に正の影響を与えていた。しかし女性のスキ・挑発原因観尺度においては、男子学生群にのみ、モノ的性意識の有意な正の影響がみられ、女子学生群では影響は示唆されなかった。男子学生群で女性のスキ・挑発原因観尺度においても、モノ的性意識の影響が示唆されたことは、モノ的性意識が女性にレイプの原因があるとする神話に与える影響が男女で異なる可能性を示しているのではないだろうか。

性の自己決定意識とレイプ神話容認態度の関連性について見ると、女子学生群において、性の自己決定権意識が高まるに伴ってレイプ神話容認態度が低くなることが見出された。しかし男子学生群では、性の自己決定意識はレイプ神話容認態度に影響を与えなかった。つまり性は自分自身に決定権があるものだという意識が高い女子学生ほど、レイプ神話を容認しないことが示唆された。しかし性の自己決定意識尺度の得点を、男子学生群・女子学生群間で比較した結果、男子学生の得点の方が高いという他の2つの性に対する意識とは異なり、群間で有意な差が得られなかった。こうした結果を示唆する知見

は先行研究により得られておらず、本研究の対象となった女子学生が持つ性の自己決定意識が特別に高かった可能性も考えられる。したがって、示唆された性の自己決定意識とレイプ神話容認態度の関係も、本研究の対象者に特異的なものだったかもしれない。

総合考察

本研究でとりあげられた平等主義的性役割態度・敵対的性信念・暴力容認態度および性に対する意識は、全てレイプ神話容認態度に対して有意な影響を持つことが見出された。しかしレイプ神話容認態度に対するこれらの規定要因の効果は、対象者の性別によって異なることが示唆されており、これは Lonsway & Fitzgerald (1995) の研究により得られた知見と一致している。これらの知見よりレイプ神話容認態度を弱めるための介入を行う際に、性別により異なった介入方法をとるほうがより効果的であると考えられる。

さらに本研究結果より、性的放縦さ・モノ的性意識・性の自己決定意識も影響を持つことが見出された。男子

学生においては、性の自己決定要因は平等主義的性役割態度と同じように、数少ないレイプ神話容認態度を弱める影響を持つ要因であることが示唆された。

レイプ被害においては、その通報率の低さが問題とされることが多いが(小西, 1996), レイプ被害の通報率の低さにもレイプ神話が影響している可能性を示唆する調査結果がある。日本において、レイプ等の性的被害を受けながら、通報しなかった被害者を対象として行った調査で、対象者に通報しなかった理由をたずねたところ「深刻な問題と思わない」という理由をあげた対象者が最も多かったと報告されたのである (Dussich & Sugano, 2001)。このようにレイプ被害者の回復に悪影響を与えるとされるレイプ神話を容認する態度が、性の自己決定意識によっても低くなることが本研究により新たに明らかになった。こうした知見が、レイプ神話の影響をなくすための介入方法研究に、今後生かされることを期待したい。